

Title	支那青銅器時代に就いての所見(梅原末治)(「歐米蒐儲支那古銅精華」別冊)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1936
Jtitle	史学 Vol.14, No.4 (1936. 3) ,p.170(708)- 172(710)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19360300-0171

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

天命建元の年次に就いて(滿文老檔の一考察) 三田村泰助
聖成吉思汗の家譜 山本守譯

であるが、本誌の特徴はその頁數の半を割いた批評・紹介、學界展望、近刊叢欄、彙報及び附録等であり、その詳細なる近刊叢欄は再域の諸誌をも網羅して甚だ便利な文獻目錄となつてゐる。文獻目錄・索引・引得等の盛に刊行せられるのは、日華を通じて最近の斯界に於ける顯著な傾向であり、過去の整理と未來の發展への導標を意味するものとして、大いに歓迎すべきことであるが、本誌の抱負や立場も又そこにあるやうであり、第二號の編輯後記には、東洋史學の整理と清掃を以て本誌の使命とされてゐる。

最後に筆者の感想と希望を述べれば、頁數の關係からとは云へ、あまりに論文翻譯の分割掲載の多いことである。もとより多數の同人諸氏の勞作を擁して、なるべく多くを發展せられんとする爲には、止むを得ないことではあらうが、將來時には一人一作きりとなつても、充實した論文を一時に掲載する位の勇氣を持つて戴きたいと思ふ。講談社式の連載主義として非難するわけではないが、一冊一冊が優れた獨立のパンフレットとなり、それに珠玉の如く雜録の附屬してゐるなどと云ふのも、清新な一形式ではあるまいか。何れにしても筆者は本誌の多幸なる發展を祈つてやまない。(杉本忠)

支那青銅器時代に就いての所見 (梅原未治)

〔歐米蒐儲支那古銅精華〕別冊)

「史學」紙上に於て道野鶴松氏と支那に於ける純銅器時代の存否に就て論戰せられた著者は更に氏が日頃の研鑽により到達した通説と異なる其の意見を概括して本篇を記述せられたのである。著者は先づ青銅器時代を定義し、人類が初め利器として石器を用ひ、後偶然の機縁で純銅の存在を知り、更にそれに錫を加へることにより青銅なる合金を生むことを知つて之で利器を作つた文化の時期を指すものと云ひ、從來の論者が銅製の容器をもつて青銅器時代の存在を立證せんとする傾向を疑ひ、他の地方の例によると青銅の容器は後期の青銅器全盛時代か又は鐵利器出現時代に發現したりと論じ、支那の場合其等の點を考慮せず、單に青銅製であると云ふのみで青銅器時代を特徴づける遺物とするのは否なりとし、支那古代の銅利器の最も特色ある戈と戚との推移を尋ね、戈の中著しく裝飾化されて一種の明器となつたものが殷墟に發見せられるが之は實用的な同種の利器から發達して來た後期のものであり、殷墟は世人の考ふる如く石金過渡期に非ずして遙かに進んだ段階に屬すると見るべきであり、また戚に於ても矢張り裝飾化したものが殷墟に多く發見されることを述べ、かゝる裝飾は同時に所謂三代の尊彝にも表はれたものであり、殷墟出土の象牙骨片の上の模様とも合致することが多い。従つてかゝる裝飾的利器の出現は尊彝や彫牙骨片と並行してゐたと考へられると論じ、纏つて尊彝の方を見ると最も嚴肅な形をして繁褥な裝飾を附した非現實的なものが形式の上から最初に位置し、それから漸次器形、圖文共に輕快化する傾向を取つたと見られる。また銘辭の方も普通殷文字と云はれる記號的なものや象形の文字が嚴肅にして繁褥

な圖文の器上に多く、銘辭發達の段階上次に位する「或る内容を持った長文の銘辭」中字體の奇古のものは前者と同様器形圖文の複雑なものの上であり、然らざるものは器形圖文の輕快化したものに表はれ、最後に戰國秦様式の刻銘が来る順序になつてをるかその變遷は大體形式から見たそれと一致する。

支那の古銅器は恐らく初め土器の外に木竹器等の中にその先行の器形あり、銅の産出の豊富になり、日常の利器を作るに餘る様になつたか、又はより優れた鐵の様な金屬の發見があつた時從來の容器を銅に變へたのではあるまいか。銅利器の中裝飾化したものが尊彝の最も古式のものとして並行するのは、それ以前實用的利器が行はれてゐた段階の存在を推測せしむるものである。殷墟が殷の後半であるとすれば裝飾化した銅利器が古式の尊彝と共に行はれたのはその時代であり、それより以前に眞の銅利器が行はれた時代が存する譯である。

今支那の古銅器を化學分析すると實際的利器は青銅質からなり、それから導かれた明器的なものは錫を含んでをらず、然しその代り鉛を含んでをる。然し之は恐らく熔融度を低下する目的であつたとみられ、また鐵と砒素の含有分の多いのもその固さを強める爲に故意に加へしものなるべく、到底石金過渡期の如き低い文化段階の所産となし難い。これは特殊の事情から錫を加へなかつたと見るべきであり、殊に鐵に關する智識も既に存してゐたと考へられる。

要するに尊彝の存在から支那に青銅器時代を考へるのは不充分であつて、敘上の理由から古式の尊彝の出現は第二の段階であ

り、それと並行する裝飾化した銅利器の形から推すとその以前に實用的利器の行はれた時代があり、殷墟の示す時代は第一第二の過渡の時機に當るのではなからうか。他の地方に於ても利器以外の銅製品の盛んな製作は鐵の知られた時期即ち鐵器時代に屬してをる。支那の場合もまた然りであり、眞の青銅器時代は尊彝出現以前とみられる。しかし支は尊彝出現前形式化した銅利器としてその後引續いた形式の發展をみ、また容器の外に別に矛や劍も存するから、支那にあつては銅容器の出現をもつて青銅器時代を前後の二期に分つことも考へ得る。どちらが是なるかは將來の研究によつて解決しなければならぬ問題である。かう云つて著者は黃河流域に銅や錫の鑛山の無いことから青銅の智識を外部から得たと想像し、之をアンダーソンの發見によつて有名になつた彩色土器の東漸と結びつけて考ふべき問題であると論じてをる。

著者の研究は其の年來の蘊蓄を傾けた所のものであり、よく前人未發の卓説によつて吾人を啓發する所極めて大である。殊に支那文化の起源の悠久なるを論じ早急なる論者の速斷を排し、まことに吾人に教示する所多い。此方面の研究に門外漢なる自分は著者の研究に對し喙をさしはさむことは出来ないがたゞ實證的科學の使命として一日も早く層位的の發見により眞に著者の斷案の立證せられんことを希望する。また非實用的な利器の前に先行する實用的銅利器の存在を氏は豫想せられるのであるが非實用的なるもの古からずと云ふ論斷は自分等の學問から云ふと或場合には成立しないこともあるべきである。即ち野蠻人が矢を飛ばさんが爲に鳥の羽を著け呪力を増さんと考ふる様に動物の模様をつけた利

器がトイテミズム等の理由から意外に初期に生れたことも考へ得る。銅鐸とか銅鼓とか云ふ様な今日から理窟のわからぬものが兎に角古代から製造せられてゐる様な實例から云つても考古學の研究の上には古代の呪術的宗教的方面からの考察が所謂非實用、實用云々の功利的見地より以上に大切なものではなからうか。然し今日梅原氏初め我國考古學者達の研究が世界的の大飛躍を爲してをるのにも拘らず宗教的土俗學的研究が依然舊套を脱せず、考古學者の研究にも側面から寄與することが出來ぬのは顧みて慚愧の念に堪えぬ。(松本信廣)

古代佛像の人類學的研究

北村直躬 著
石崎達二 著
岩波書店發行

本書は人類學的研究の立場に立つ北村博士と佛教美術史的研究の立場に立つ石崎學士との共同作品であり、佛教に於る造像の歴史に關與した人種の體質的特徴と、我古代佛像彫刻の上に認めんとする——古代佛像の上に佛教傳來の歴史を人類學的に認めんとするものである。

著者に依れば、佛像が人體を模したものであるとすれば、それが寫實的なる限に於て、生體計測法の如き精密なる自然科学的研究方法を用ひて佛像を研究することは極めて合理的である。少くとも佛像の面相、體型、姿勢等の如き形態に關するものはこの方法で、之を人體同様に取扱つて差支ないのである。彫像の表情の如きものは、その形態の各部の量的比例の綜合に外ならぬ故、作品の表情に依て美的價值判斷をなす場合、面相や體型等の數値は

極めて重大なる意義を有するものである。佛像が他の藝術品と異るところは、それが人體を模した點にある。従つて佛像には他の彫像の場合と同様美的表現以外に性的表現、人類體質的表現の如き特殊の要素が存在するのである。この點からいつて人類學的觀察——實測に依る數値の人類學的觀察が當然必要になつて來るのである。

更に史的研究上佛像の有する特殊性は、地理的に廣範圍に互つて傳承されたこと、又十數世紀に互つてその製作が繼續されたことである。従つて佛像の地理的乃至時代的特色には、それが人體を模したものである限、人類體質的諸特徴と程度の差はあれ、中心の要素として有するものであり、佛像の史的研究に人類體質學の知識を適用することはこの意味に於て必要であるといふのである。

著者は斯る立場に立つて、美術史に於けるわが造像様式の發展、わが古代彫刻に對する體質人類的研究法の應用、わが古代佛像の體質的諸相、佛像の體質的特徴の時代別比較を説き、附録として、人類學と歴史學との交渉に就て或暗示を與へる聖德太子の御事蹟と御體質を加へてゐる。

本來佛像は信仰の具であるが故に、又造像には種々の約束なるものがあるが故に、純然たる寫實的製作物とは或はいへないかも知れないが、時代の好尚、民族の特質を反映してゐるものとはみることが出來よう。

要するに本書は、審美的立場からのみ美醜を批判する、從來の佛像研究に一步を進めて、生體計測法を用ひて佛像觀察の基礎を